

< 論文 >

地域の物理的・社会的環境要因が 女子大学生の犯罪不安に与える影響

森 康 浩

問題

我が国の犯罪の現状は平成 28 年時点で、約 148 万件にのぼり、減少傾向にある。犯罪件数を日本の宅地面積で割ると、1km²あたり 68.77 件の犯罪が発生していることとなる。日本全国各地でも犯罪が起きる可能性があるが、等確率で犯罪が起きているわけではない。犯罪が特に集中して発生する場所が存在する。このような場所をホットスポットといい、「犯罪の発生が非常に頻繁で、少なくとも 1 年間についてかなり予測可能な狭い場所」と定義づけられている (Sherman, 1995)。

本研究では桜ヶ丘を調査対象地とするが、女子大学生が多く住むためのぞきやつきまといなどの犯罪が起きやすいホットスポットになりうる可能性がある。このような地域に住む女子大学生が地域に対してどの程度犯罪不安を感じているのか、犯罪と関わりが深い地域内の物理的・社会的要因をどのように認知しているのか、これらの要因と犯罪不安の関係について明らかにする。

本研究が対象とする桜ヶ丘は 1960 年代半ばからある比較的古い地域であり、住民の約 39% が 60 歳以上である (仙台市, 2019)。町内会も複数存在しており、地域ネットワークが形成されている。また、桜ヶ丘には公園や学校などの公共施設があり、地域住民の交流できる場が多く存在している。さらに、その施設を利用する住民の中でも既にネットワークが形成されている。大学在学中一時的に桜ヶ丘に住む女子大学生と昔から住み続けている地域住民が共存する桜ヶ丘でどのような社会的要因・物理的要因が機能しているのかを明らかにする。

犯罪不安について

犯罪不安とは、「犯罪や、人間が犯罪に関連付けるシンボルに対する、恐れまたは不安といった感情的な反応」と定義している (Ferraro, 1995)。また、Ferraro (1995) は、大都市に住む住民は、小都市や町民に住む住民よりも、匿名性が高くなることや生活時間帯が深夜に及ぶため犯罪不安を感じる機会が多く、犯罪不安の水準が高くなることも明らかにしている。犯罪不

安には、代理被害 (vicarious victimization) や間接被害 (indirect victimization) があり、家族や知人が犯罪不安に遭うことや犯罪被害を伝え聞くことで、自分自身が犯罪被害に遭わない場合でも、犯罪不安が高まるというものである。内閣府が行った調査によると、「ここ 10 年で日本の治安はよくなったと思うか、悪くなったと思うか」という質問に対する回答を平成 24 年度と平成 29 年度で比較したところ、良くなったと回答する人は 15.8% から 35.5% へ 2 倍になっているものの、どちらかといえば悪くなったと思うと回答している人が、52.6% から 48.6% と微減しており、実際の犯罪件数が減っている一方で、一定する割合で治安が悪いと判断する人がいることが示されている (内閣府, 2017)。

女性は、男性と比較して、身体的・社会的に脆弱なため、犯罪不安が高い傾向にあることが指摘されている (Ferraro, 1995)。また、女性は男性よりも共感性が高く、自分が見聞きした被害者の気持ちに共感して、より不安感を高める可能性があることも指摘されている (岡本・松原, 2015)。

犯罪と関連する物理的要因

Wilson & Kelling (1982) は「割れ窓理論」を提唱しており、割れた窓のような秩序違反を放置すると、周囲の人から注意が向けられていない放置された場所、悪いことを行っても咎められない場所というサインとなり、軽微な犯罪が増え、終いには重大な犯罪を呼び込んでしまうことを指している。つまり、環境が悪化することで、犯罪を助長する要因となり得る可能性がある。

また、雨宮・横張 (2003) の研究では、明かりが少なく周辺の人々の目が行き届きにくい公園では監視性が欠如して犯罪不安が高くなることや、雨宮・島田 (2009) の研究では、山林や荒地、管理が放棄された空き地は、暗く人気もないため不安場所として指摘されやすいことが明らかになっている。また、犯罪不安の程度・不安場所の数は一定の傾向があり、ホットスポットに集中していることも分かっている。しかし、犯罪や犯罪不安を抑制するにはこれらの犯罪不安を高める環境要因を改善するだけではなく、不安場所の属性や不安の理由は地域の特性によって異なるため、地域の特徴を反映した犯罪抑制の取り組みが必要であると指摘されている (雨宮・島田, 2009)。

犯罪と関連する社会的要因

地域住民との人間関係は、さまざまな形で犯罪不安に効果がある。住民のつながりの密度が高いほど、警察や裁判所などの公的機関の統制や個人が犯罪に対して備えるといった私的な統制、近隣住民がお互いの家が被害にあわないように目配りするといった近隣統制などの犯罪統制機能が働きやすくなり、犯罪が抑制されると考えられている (Bursik & Grasmick, 1992)。

また、これらの犯罪統制機能の中でも、私的な統制や近隣統制などの公的な権力に頼らない社会統制を介して形成される人間関係や信頼感は、犯罪不安を緩和させることが明らかになっている (Riger et al., 1981)。公的な権力に頼らない社会統制の例として、警察以外の主体による市民パトロール (citizen patrol) が知られており、Yin (1976) は、市民パトロールには、犯罪の削減や市民の安心感の向上に効果があるとしている。

こういった社会と地域における人々の信頼関係や結びつきを表す概念として、「ソーシャルキャピタル」がある。「ソーシャルキャピタル」とは、人々の協調行動を活発にすることによって、社会の効率性を高めることのできる「信頼」「(互酬性) 規範」「ネットワーク」といった社会組織の特徴のことであり、共通の目標に向けての社会組織の協調行動を導くとされている。ソーシャルキャピタルの形成されている地域では、住民同士の信頼関係を生み、活動の活発化に影響をあたえ、地域に好循環をもたらしていくことが明らかになっている (立木, 2008)。ソーシャルキャピタルと犯罪に関する研究として高木ら (2010) の研究では、ソーシャルキャピタルが豊富な街区では住民の協力的行動がさかんに行われており、そのような街区では空き巣や車上ねらいの被害が少ないことを示している。

本研究の目的

社会的なつながりがあることや秩序違反した物理的な特徴が少ないほど、犯罪を抑止する力がある。本研究では、桜ヶ丘に居住する女子大学生がそれらをどのように認知して、どのような機能を果たしているのかについてアンケート調査を行い、犯罪不安と関連する地域内の物理的環境要因や社会的環境要因がどのようなかわりを持っているのかについて検討を行う。

方法

桜ヶ丘に居住する女子大学生の犯罪不安、地域内の犯罪と関連する物理的要因・社会的要因をどのように認知しているのか、犯罪不安と物理的要因・社会的要因の関連を調べるためにアンケート調査を実施した。

調査対象者・手続き

桜ヶ丘に住む宮城学院女子大学の1~4年生の学生 111 名に調査を行った。質問紙の配布及び回答は大学の講義時間を利用して行った。回答所用時間は約 10 分であった。

質問紙の構成

1) 犯罪不安について

「暴行や障害などの暴力的な犯罪にあう心配」「ひったくり・すりにあう心配」「ストーカーの被害にあう心配」「知らない人に声をかけられる心配」「変質者が出る心配」「自宅に空き巣に入られる心配」「自宅を人にのぞかれる心配」「自転車を盗まれる心配」「出したゴミを漁られる心配」「落書きやピンポンダッシュ等のいたずらをされる心配」の10項目を1（心配ではない）、2、3、4、5（心配だ）の5件法で尋ねた。

2) 防犯対策行動について

「外を歩くときはヘッドホン・イヤホンを着用しないようにしている」「携帯をいじりながら歩かないようにしている」「夜間、人通りの多い道を歩くようにしている」「夜間、なるべく明るい道を歩くようにしている」「在宅時もカギをかけている」「洗濯物を外に干さないようにしている」「知っている人以外はドアを開けないようにしている」「防犯ブザーを身につけるようにしている」「カーテンを開けないようにしている」を「よくしている」「たまにしている」「あまりしていない」「全くしていない」の4件法で尋ねた。

3) 地域内の物理的要因について

「空き家の数」「街灯の数」「通学路に落ちているごみ」「夜間にたむろしている若者」「夜間の人通り」の5項目を1（少ない）、2、3、4、5（多い）の5件法で尋ねた。

4) 地域内の社会的要因について

「近所の人とあいさつをどの程度するか」「近所の人と立ち話をどの程度するか」「近所の人とどの程度一緒に食事をするか」「近所の人とどの程度相談事をするか」を1（全くしない）、2、3、4、5（とてもよくする）の5件法で尋ねた。

「地域のイベントがされているのを見たことがあるか」を「よく見る」「たまに見る」「あまり見ない」「見たことがない」の4件法で回答を求めた。「お住まいの周辺で地域住民の防犯パトロールを見るか」を「よく見かける」「時々見かける」「あまり見かけない」「見たことがない」の4件法で尋ねた。

5) デモグラフィック項目

住んでいる丁目について「桜ヶ丘何丁目に住んでいますか」と1丁目～9丁目の数字を選択してもらった。居住年数については、「1年目」「2年目」「3年目」「4年目」「5年目」「6年以上」の6件法で回答を求めた。住んでいる階については、「1階」「2階以上」の2件法で、回答を

求めた。帰宅が夜遅くなる程度について「とてもよくある」「ときどきある」「どちらでもない」「ほとんどない」「全くない」の5件法を用いた。

結果

桜ヶ丘に居住する女子大学生の犯罪不安、地域の物理的要因・社会的要因について質問紙調査を行い、収集したデータについてそれぞれの傾向を検討するために集計を行った。

犯罪不安について

犯罪不安の認知を明らかにするために10項目の回答を求めた。その結果、「変質者がでる心配」が一番高く、次いで、「知らない人に声をかけられる心配」、「自宅を人にのぞかれる心配」が順に高かった。一方で、「落書きやピンポンダッシュ等のいたずらをされる心配」、「出したゴミを漁られる心配」については相対的に低い値であった(図1)。

犯罪不安尺度の作成

地域に対する犯罪不安を測定するための10項目について、因子分析を行い、尺度を作成した(表1)。その結果、第1因子は直接的な被害のある内容が多かったため「直接的犯罪不安」と名付けた($a = .92$)。また、第2因子は当事者自身というよりはものに対する被害があるものが多かったため「間接的犯罪不安」と名付けた($a = .82$)。犯罪不安について以下の分析では「直接的犯罪不安」と「間接的犯罪不安」に分けて分析を行う。

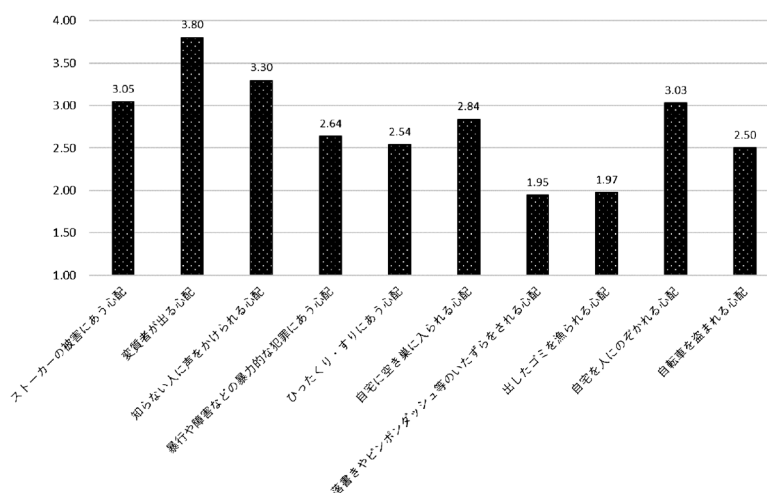


図1 犯罪不安に関する項目ごとの平均値

表1 犯罪不安尺度の構成項目

	I	II
ストーカーの被害にあう心配	.87	.27
変質者が出る心配	.81	.26
知らない人に声をかけられる心配	.80	.27
暴行や障害などの暴力的な犯罪にあう心配	.80	.27
ひったくりすりにあう心配	.80	.35
自宅に空き巣に入られる心配	.22	.81
落書き	.31	.77
出したゴミを漁られる心配	.16	.73
自宅を人にのぞかれる心配	.37	.71
自転車を盗まれる心配	.40	.46
成分	I	II
I	-	.63
II		-

デモグラフィック項目と犯罪不安の関連

各犯罪不安が質問紙調査によって確認した「居住地（丁目）」「居住年数」「夜間帰宅傾向」「居住階数」のデモグラフィック項目それぞれにおいて違いが見られるのか検討を行った。

女子大学生が居住している丁目ごとに、各犯罪不安の傾向について検討した（図2）。それぞれの丁目ごとの回答者は2丁目：34人、3丁目：10人、4丁目：11人、5丁目：24人、6丁目：7名、7丁目：21人、9丁目：4人であった。直接的犯罪不安について7丁目、4丁目、3丁目の順に犯罪不安を感じていることが示された。間接的犯罪不安では、4丁目、6丁目、9丁目の順に値が高かった。犯罪不安でのみ有意な差（ $F(1, 104) = 28.24, p < .001$ ）が見られ、直接的犯罪不安の方が間接的犯罪不安よりも高いことが示されたが、丁目（ $F(1, 104) = 1.99, n.s.$ ）、犯罪不安×丁目の交互作用（ $F(1, 104) = .65, n.s.$ ）について有意な差が見られなかった。下位検定の結果、間接的犯罪不安において、2丁目と4丁目の間に差が見られた（ $F(6, 110) = 2.64, p < .05$ ）。

次に、居住年数ごとに犯罪不安に違いがあるか検討を行った（図3）。その結果、犯罪不安（ $F(1, 106) = 14.56, p < .001$ ）、犯罪不安と居住年数の交互作用（ $F(4, 106) = 2.19, p < .10$ ）に有意な差、有意傾向で差がみられた。居住年数には有意な差が見られなかった（ $F(4, 106) = .66, n.s.$ ）。つまり、直接的な犯罪不安の方が間接的な犯罪不安より、犯罪不安を感じていることが示された。居住年数によって、犯罪不安に変化がないものの、居住年数ごとに、直接的犯罪不安・間接的犯罪不安の値が異なることが示された。直接的犯罪不安は居住年数が4年目の女子大学生が一番感じており、間接的犯罪不安は2年目の女子大学生が一番認知していることが示された。

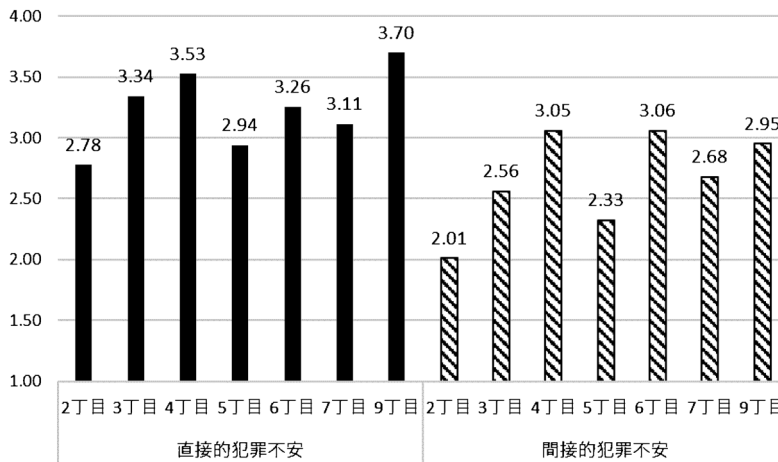


図2 居住地（丁目）ごとの犯罪不安

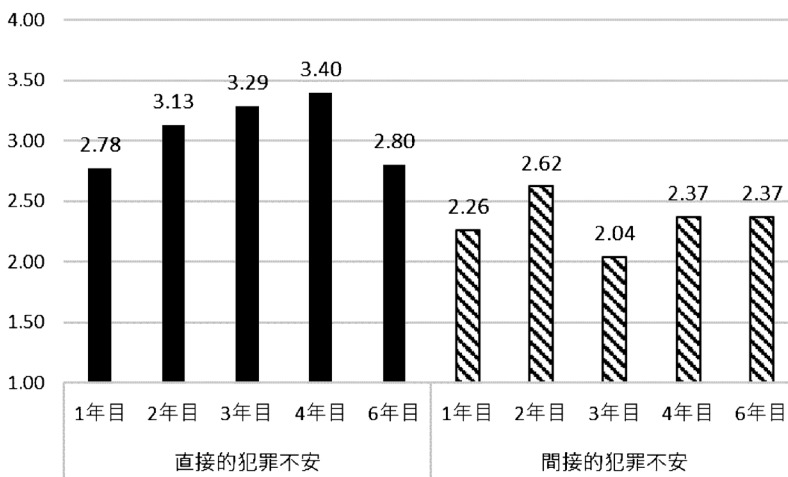


図3 居住年数ごとの犯罪不安

続いて、女子学生の居住階数の違いによって犯罪不安をどの程度認知しているかを検討した（図4）。その結果、犯罪不安の違いにのみ有意な差が見られ（ $F(4, 102)=41.72, p<.001$ ）、居住階数（ $F(4, 102)=.04, n.s.$ ）、犯罪不安と居住階数の間の交互作用（ $F(1, 102)=.03, n.s.$ ）では、有意な差が見られなかった。つまり、居住階数にかかわらず、直接的犯罪不安の方が強く認知されていることが示された。

夜遅くに帰宅する傾向と犯罪不安の関係について分析を行った（図5）。夜遅くに帰宅する傾向はあまり遅くならない人たち（低群）、遅くなる人がよくある人たち（高群）の2群に

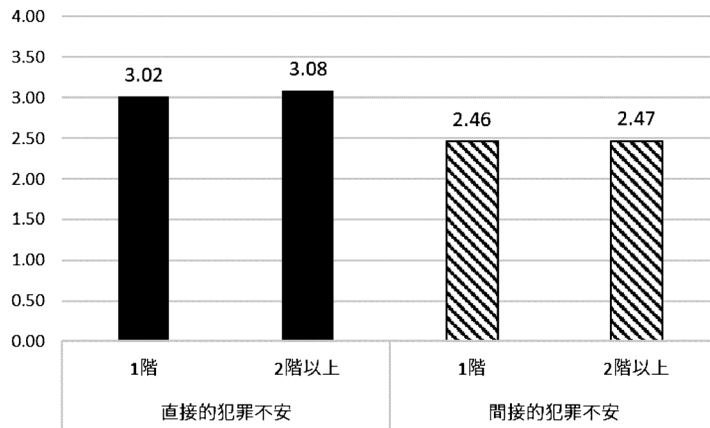


図4 居住階数ごとの犯罪不安

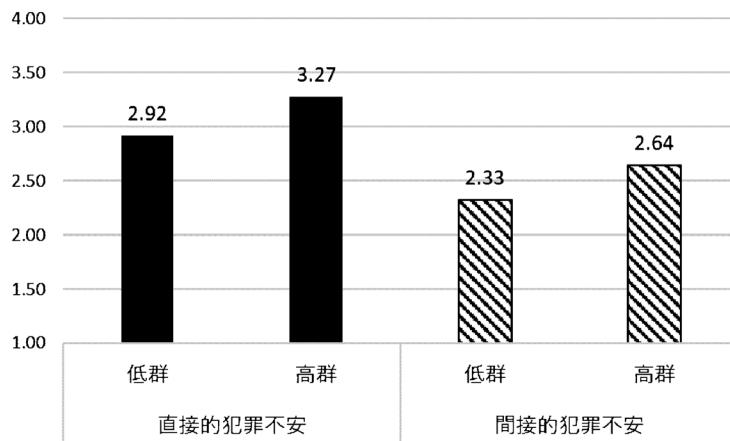


図5 帰宅時間と犯罪不安の関係

分けた。その結果、犯罪不安 ($F(1, 109) = 49.79, p < .001$) と帰宅が遅くなる傾向 ($F(1, 109) = 3.16, p < .10$) に差が見られたが、犯罪不安と帰宅が遅くなる傾向の交互作用 ($F(1, 109) = .05, n.s.$) には有意な差が見られなかった。つまり、直接的犯罪不安を強く感じていることと、夜遅く帰る人の方が犯罪不安を高く感じていることが示された。

犯罪への防犯行動について

日常生活を送る上でどのような防犯行動を行っているか回答を求めた。その結果、「在宅時にカギをかけている」警告が一番高く、次いで、「知っている人以外はドアを開けないようにしている」という行動をしている人が多かった。逆に「防犯ブザーを身につけていないひとが

多いことが示された（図6）。それぞれの項目間に有意な差が見られた（ $F(8, 872)=82.52, p<.001$ ）。

物理的要因について

地域の中に存在する犯罪と関連する物理的要因についてどの程度存在を認知しているのかを確認した（図7）。その結果、「通学路に落ちているごみ」、「空き家の数」は少ないと評価しており、きれいな・整った環境が作られていることが示された。また、「街灯の数」はやや少ないと評価し、さらに「夜間の人通り」は少ないと回答する傾向が多いことが示された。つまり、

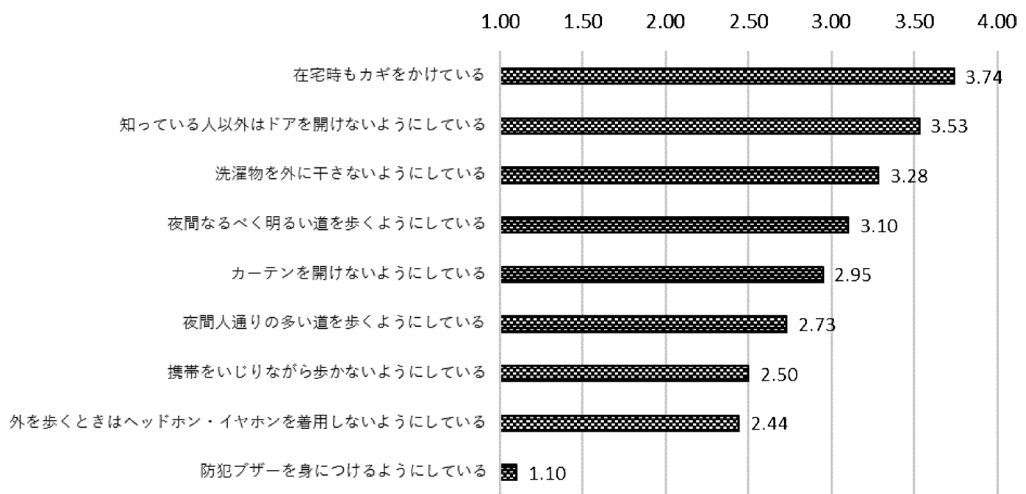


図6 日常における防犯行動の傾向

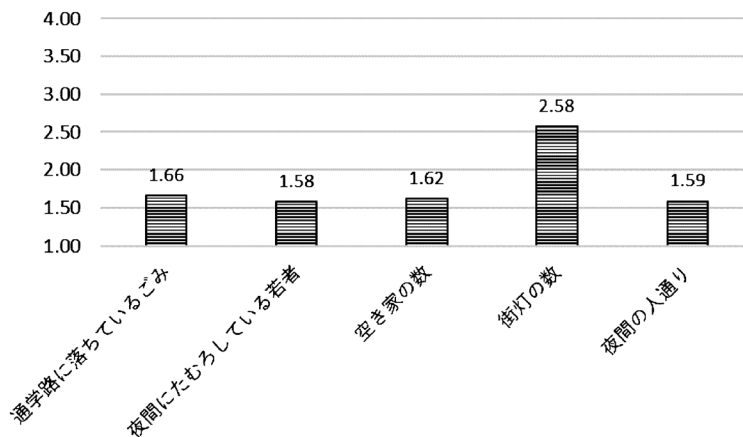


図7 地域内の物理的特徴について

割れ窓理論が想定するような地域の中の秩序違反の数は少ないが、街灯、夜間の人通りが少ないといった夜間の環境が犯罪不安を増強させてしまう可能性があることが示された。

地域の物理的特徴について因子分析を行い、意味のある特徴に分類を行った(表2)。その結果、第1因子が「通学路に落ちているごみ」、「夜間にたむろしている若者」、「空き家の数」の3つ、第2因子が「街灯の数」、「夜間の人通り」の2つに分かれた。前者は割れ窓理論とも関連がある内容だったため「荒廃要因」($\alpha = .46$)、後者を夜間の帰宅時にかかわりが深い項目だったため「夜間不安要因」($\alpha = .50$)と名付けた。

社会的要因について

桜ヶ丘に住んでいる女子大学生が地域の方とどのような交流を行っているのかについて確認するために、近所づきあいに関して回答を求めた(図8)。その結果、相談事をする、食事をする、立ち話をするなど深い関わりがあることについてほとんどの人全く行っていないことが示された。挨拶についてのみ「全くしない」と回答する人が少ないことが示された。以上の4項目を用いて地域住民との関わりを示す「親密な関係尺度」を作成した($\alpha = .74$)。

表2 物理的要因の分類

	I	II
通学路に落ちているごみ	.76	.01
夜間にたむろしている若者	.68	.32
空き家の数	.59	-.12
街灯の数	-.24	.82
夜間の人通り	.30	.79

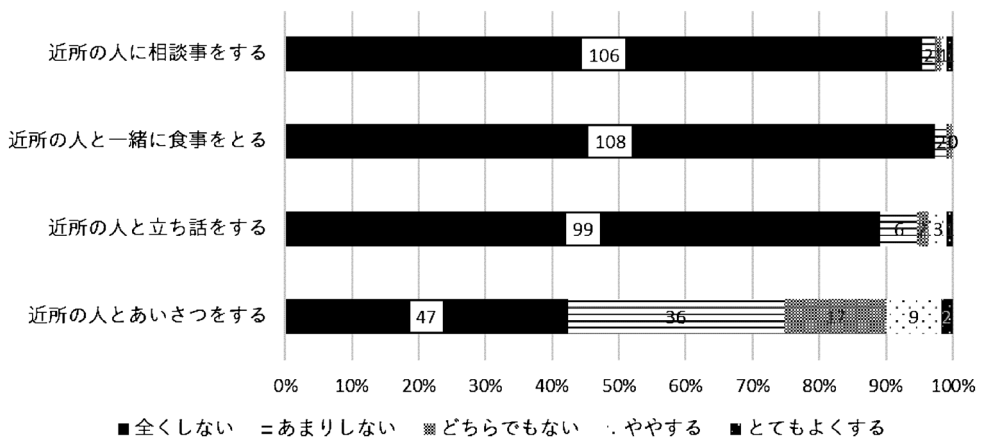


図8 地域における社会的関係について

地域内の物理的要因・社会的要因が犯罪不安に与える影響について

地域内に存在する物理的要因や社会的要因が直接的・間接的犯罪不安にどのように与えているのか検討するために、物理的要因と社会的要因を独立変数、2つの犯罪不安を従属変数として重回帰分析を行った(表3)。その結果、直接的犯罪不安に対しては、物理的要因である荒廃要因と夜間不安要因が有意な影響が見られた。荒廃要因が多いほど直接的犯罪不安を高め、街灯の数や夜間の人通りといった夜間不安要因が減ると、直接的犯罪不安が高まることが示された。間接的犯罪不安に対しては、物理的要因のうち、荒廃要因が、社会的要因では、住民防犯パトロールが有意に影響していた。荒廃要因が多いほど間接的犯罪不安を高め、住民防犯パトロールが行われているほど、犯罪不安が下がることが示された。

考察

本研究は、桜ヶ丘に住む女子大学生を対象に地域の物理的環境要因・社会的環境要因が犯罪不安に対してどのような影響をもたらすかについて検討を行った。本研究が対象とした女子大学生が住む桜ヶ丘は、地域住民と女子大学生という異なる主体が共存する場所である。町内会が複数あることで、地域住民同士の交流がなされているということは、Goudriaan, Wittebrood, & Nieuwbeerta (2005) が想定するような、近隣住民との凝集性が高いことで、犯罪に対処する環境が整えられやすい。しかし、桜ヶ丘に住む女子大学生は本研究の結果からも示されている通り、あいさつ程度の交流があるもののそれ以上の交流は乏しい。また、日中は大学で講義を受けており、放課後はサークル活動やバイトに勤しむ生活スタイルになっているため、地域住民と地域の中にいる時間がずれている。このように、凝集性の高いコミュニティと地域との交流が薄い女子大学生が共存する場所では社会的要因がどの程度機能しているのか。また、のぞきやつきまといなどといった犯罪に遭遇しやすい女子大学生が社会的要因の恩恵を受けられないのであれば、割れ窓理論が想定する地域内の秩序違反の多い・少ないがどのように女子大学生の犯罪不安の低減に効果を発揮するのかを明らかにすることが本研究の主眼である。

表3 物理的要因・社会的要因が犯罪不安に与える影響

		直接的犯罪不安		間接的犯罪不安	
物理的要因	荒廃要因	.18	<i>p</i> <.10	.18	<i>p</i> <.10
	夜間不安要因	-.23	<i>p</i> <.05	-.14	<i>n.s.</i>
社会的要因	地域のイベントを見たことがあるか	-.09	<i>n.s.</i>	-.06	<i>n.s.</i>
	親密な関係尺度	-.05	<i>n.s.</i>	-.14	<i>n.s.</i>
	住民防犯パトロール	-.11	<i>n.s.</i>	-.17	<i>p</i> <.10
<i>R</i> ²		.11	<i>p</i> <.05	.10	<i>p</i> <.05

桜ヶ丘に住む女子大生は、ごみを漁られたり、自転車を盗まれるという間接的な犯罪不安よりも、ストーキングされることや変質者にあうといった直接的な経験に基づく犯罪不安を強く抱いていることが示された。また、帰宅時間が遅い方が、直接的・間接的犯罪不安が高まることが示された。そして、犯罪不安に影響を与える要因として、直接的犯罪不安にも間接的犯罪不安にも地域の中に秩序が少ないほど犯罪不安が低くなること、直接的犯罪不安には、さらに夜道に不安になる環境が影響することが示された。間接的犯罪不安には、住民のパトロールが有効であることも示された。そのため、ポイ捨てや家庭ごみの散乱がなく、地域の中を地域住民みんなで管理しているという犯罪者が地域の中に入り込みにくい空間づくり、秩序が整った状況を維持することが重要である。そして、住民のパトロールだけにとどまらず、夜間の人通りの多さ、賑わいの確保、暗い場所での対策が必要になるだろう。このような取り組みを行うことで、犯罪予防につながり、住民の犯罪にあるという不安を低減する働きが期待できる。

本研究は、質問紙を用いて、桜ヶ丘に住む女子大学生を対象に地域に対する犯罪不安の認知、地域内の社会的なつながりや犯罪と関連する物理的な環境の認知を測定して、それらの関係を検討した。桜ヶ丘に住む女子大学生の傾向をとらえるためには、多くの知見を集めることができた。しかし、各種犯罪の発生件数や桜ヶ丘地域内からの警察への通報数など、犯罪と関連する多くの社会的指標がある。これらのデータと質問紙で集めたデータとの関連を検討することで、現実の状況を踏まえた知見をさらに出すことができたかもしれない。しかし、犯罪に関する社会指標は警察などが持っており、研究を遂行するにあたり入手が困難な場合がある。今後、各所関係機関と連携しながら、社会に還元可能な知見を発信していく必要がある。さらに、女子大学生だけではなく地域住民にも同様の質問紙調査を行うことで、どのように地域を認知しているのか女子大学生と比較しながら検討する必要があるだろう。

このような問題点があるものの、女子大学生が多く住む地域での、地域の在り方を考えるきっかけを見出した。犯罪にあうリスクが高い女子大学生を守るために、地域としてどのような社会・物理的環境づくりが必要なのかを検討することができた。また、女子大学生自身も地域コミュニティの中に入り、連携を深めることで、お互いに知らない他者ではなく、お互いに関心を向けあい犯罪者が入り込みづらい自然な監視が可能な状況を作り上げることが地域の方々、女子大学生双方の生活を守るために意味があることになるだろう。全国に大学はいくつもあるが、今後も地域と学生が連携した防犯に強いまちづくりに関する知見を積み重ねることで地域活性化の一助に成り得るのではないだろうか。

引用文献

- 雨宮護・横張真(2003). ニュータウン内の公園・緑道における犯罪不安発生の実態
雨宮護・島田貴仁(2009). 都市の空間構成と犯罪不安の関連-地域特性を考慮した防犯まちづくりにむ

けた基礎的研究

- Bursik, R. J., Jr., & Grasmick, H. G. (1992) *Neighborhoods and crime: The dimensions of effective community control*. San Francisco, CA: Lexington Books.
- Ferraro, K. F. (1995). *Fear of Crime: Interpreting Victimization risk*, Albany: State University of New York Press.
- Goudriaan, H., Wittebrood, K., & Nieuwebeerta, P. (2005). Neighbourhood Characteristics and Reporting Crime: Effects of Social Cohesion, Confidence in Police Effectiveness and Socio-Economic Disadvantage 1. *British journal of criminology*, 46 (4), 719–742.
- 内閣府 (2017). <https://survey.gov-online.go.jp/tokubetu/h29/h29-chian.pdf> (2019年10月11日)
- 岡本英生・松原英世 (2015). 犯罪事件についての不安感に影響を与える要因について
- Riger, S., & Gordon, M. T. (1981) The fear of rape: A study in social control. *Journal of Social Issues*, 37, 71–92
- 仙台市 (2019). 町名別年齢別住民基本台帳人口 (平成31年1月1日現在)
- Sherman, L. W. (1995). Hot spots of crime and criminal careers of places. *Crime and place*, 4, 35–52.
- 高木大資・辻竜平・池田謙一 (2010). 地域コミュニティによる犯罪抑制－地域内の社会関係資本および協力行動に視点を当てて－社会心理学研究, 26, 36–45
- 立木茂雄 (2008). 「ソーシャルキャピタルの視点から見た地域コミュニティの活性度と安全・安心」
- Wilson, J. and Kelling, G. (1982). The police and neighborhood safety: Broken windows. *The Atlantic Monthly*, 211, 29–38.
- Yin, R. K., Vogel, M. E., Chaiken, J. M., & Both, D. R. (1976). *Citizen patrol projects: National evaluation program phase 1 summary report*. Washington, D. C.: US Department of Justice.

(2019年10月23日受領、2019年11月18日受理)

(Received October 23, 2019; Accepted November 18, 2019)

Effects of Physical and Social Factors on Fear of Crime in Female Students

Yasuhiro MORI

In the current study, we surveyed female university students in Sakuragaoka on their fear of crime. Sakuragaoka houses a large number of female university students, as well as common residents. The students tend to live alone, and thus become easy targets of sexual crime. The purpose of this study is to clarify the effect of physical (e.g. number of street lamps, number of trash cans) and social (e.g. connectedness with neighbors, frequency of volunteer patrols by residents) factors present in local communities, on female students' fear of crime. Our results show that while both physical and social factors impact levels of fear, physical factors have a greater effect. Of the social factors, only the frequency of residents' patrol had significant effects. We discuss implications for policy-making and urban development.